２０２４年（令和６年）１２月１６日　月曜日

東奥日報　１２面　掲載

八戸での暮らし 順調？

外国人介護人材×雇用側 交流会

仕事や留学で市内に住む外国人が、仕事のやりがいや行政、施設に望む支援などをテーマに懇談した交流会

「漢字、雪に苦労…」思い打ち明け 理解深める

八戸

八戸市内の介護施設関係者らと、働く外国人との交流会が８日、八戸市美術館で開かれた。外国人が仕事や日常生活で感じる地域の良さ、悩みについて思いを伝え、受け入れ側と和やかに懇談。互いに考え方やサポートの在り方について理解を深めた。（下舘悠々）

市が本年度から取り組む外国人介護人材交流会事業。交流会は、委託を受けた八戸学院地域連携研究センターが企画し、八戸学院大学短期大学部の学生を含めて介護事業所で働くネパールやタイ、インドネシアの外国人14人が参加した。雇用する施設、外国人雇用に興味を持つ事業所、県や市など県内外の関係者計約40人が懇談した。

参加者は6班に分かれて緊張をほぐすアイスブレークをした後、①介護職の魅力②仕事を覚える上での困りごとと求めるサポート③同市に定着するための有効な支援策―のテーマについて話し合った。

外国人は「日本語、漢字が難しい」「雪が降らないネパールと違ってとても寒い」などと日頃の思いを打ち明けていた。

同市湊高台3丁目のグループホーム「トントン邑（むら）」を運営し、外国人雇用を検討しているNPO法人「しゃらく」の清水信敏理事長は、現在施設従業員のほとんどが高齢者だとし、「国内の若手人材は集まらず、外国人の力を借りないと成り立たなくなる。実際に話してみると、よく日本語を勉強していて皆真面目。日本の生活に溶け込む努力をしていると感じた」と印象を語った。

研究センターの松山政義部長は「外国人に対していまだにステレオタイプのマイナスイメージを持つ人も多い。実際は一生懸命働く人たちだと知ってもらい、外国人が地域に定着できるよう交流会を全県に広めていきたい」と話した。

同交流会事業として、11月には同市と南部町の職員、同大学部教員、介護施設相談員をパネリストにしたパネルディスカッションを開催。外国人の介護人材受け入れの現状と課題について意見が交わされた。

東奥日報社提供

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです